

空とぶ船の旅から

熊野谷 葉子

「空とぶ船」というロシア昔話がある。主人公は、例によってできそこないの三男坊。王様が「空とぶ船を持ってきたものに娘をやる」というので何の目算もなしに家を出るのだが、当然親は冷たくて、ろくなお弁当ももたせてくれない。でもこの弁当を、出会った貧相なおじいさんに分けてあげたおかげで、空とぶ船はちゃんと出来てしまうし、速足だの大食いだの何でも冷却男だのといった超能力者が7人も仲間になってくれる。そしてこの男たちは陽気に歌いながら、川や畑や街道の上を王様のいる都まで飛んで行くのだ。

この船から見た光景を想像するのは楽しい。どこまでも続く森、野原や畑を蛇行する川と点在する村、ちらりと光る教会のたまねぎ頭…。そんな古い絵本のような風景を、2009年秋のロシアの旅ではいくつも目にすることができた。首都モスクワは、車道はおろか歩道にまで車があふれるおぞましい有様だったが、そこをさっさと東に抜けてヴォルガとその支流にある美しい町を少しずつ見て回るという旅は、考えてみればそれ自体、空とぶ船からロシアを俯瞰するようなものだったのかもしれない。

古き都のおもかげ

昔話の空とぶ船が降りた都は、どんな所だったのだろうか。今のモスクワのクレムリンではいかめしすぎる。きっと古都スーズダリのクレムリンなら…と思っていたら、スーズダリのクレムリンには城壁がなかった。かつては土塁の上に板壁がめぐらされていたが、それが焼失して以来、中は丸見えなのである。歴史的建築物の宝庫とは言え、やはり城壁がないと、古きロシアの都というよりは教会や聖堂のある公園、といった趣になってしまう。

その代わり、「おお、これぞ往時の白き石のモスクワ！」という風景を、クレムリンからは最も離れたエフィーモフ修道院脇で発見した。

修道院構内の見学を終えて門外の土産物屋をひやかし、その先の空地にふらふらと出て行くと、そこは町外れを望む高台だった。眼下にはカーメンカ川がゆるいカーブをえがいて流れ、対岸は草と低木におおわれた10メートルほどの崖。その上に、白い城壁をぐるりとめぐらせた町があるではない



か。壁の向こうには、民家とおぼしき建物や教会のたまねぎ頭。きっと空とぶ船はこんな町に舞い降りたのだ…と見とれていたが、実際には、これは町ではない。16世紀に築かれたポクロフ修道院である。しかしまあ、修道院と言え、敷地内に教会や居住棟や倉庫、畑も家畜も有する一大施設である。昔話の王様が暮らす小さな国の都として思い描くには、ちょうど良いサイズなのかもしれない。

原っぱの世界遺産

さて、この昔話を再話した絵本「空とぶ船と世界一のばか」（アーサー・ランサム文、ユリー・シュルヴィッツ絵、神宮輝夫訳、岩波書店、1970）にはこんな一文がある。

「ばかむすこは、まず、街道にむかい、それから、街道のま上をすすんだ。田や畑の上をとんだら、ひろすぎて道にまよう心配があった」

たしかにロシアは広い。街道や川を目じるしにしなければ空中で迷子になりそうだ。ただし、ロシアで延々と広がっているのは、きちんと耕された畑というより(まして田ではないと思うが)、むしろ森林か野原ではないだろうか。ウラジーミル市からほど近いところにある「ネルリ川のポクロフ教会 Церковь Покрова на Нерли」は、まさにそんな広大な野原の中にぽつんと立っていた。

市内から10分ほど走ったところで車を降り、線路を越えてまばらな木立の間を抜けると、ぽーンと視界が開ける。少なくとも向こう1キロは樹木もまばらで人家もない。はるかかなたにぼんやり村の影が見える程度だ。その村の人だろうか、白いプラトックをかぶったおばちゃんが一人、ヤギの群れを追っている。私たちの足元からのびて原っぱを横切る石畳の道は、白く小さく見えている教会に続いている。自称（つまりパンフレットによると）「ロシアでもっとも美しい」ポクロフ教会である。

この教会は12世紀にスーズダリのアンドレイ・ボゴリューボフ公が建てたもので、対



原っぱの向こうにネルリ川のポクロフ教会が見える

ブルガール戦の勝利と、その戦いで亡くなった息子を記念している。ユネスコの世界遺産に登録されていて有名なもので、観光客も多い。確かにその古風で控えめなフォルムは美しく、白壁に施されたダビデ王や動物たちのレリーフには何ともいえない味がある。が、この教会を特徴付けているのは何といてもその位置、草原の中にぽつんと一つ立っている景観であろう。近づいてみると、教会の建物は原っぱよりも一段高いところに築かれており、周囲

にはお堀のように水が流れている。実はこの教会、わざわざネルリ川とクリャジマ川の合流地点に建てられているのだ。アンドレイ公は、ルーシの基本的な交通手段であった河川交通の要衝としてこの地を選び、5メートル以上の盛り土工事をした上で教会を建築したのだという。

なるほどこれで、なぜ教会の周囲が何も無い原っぱになっているのかが分かった。クリャジマ川とネルリ川が雪解け水を大量にあふれさせる春先、このあたりはすっかり冠水してしまうのだ。だから木も生えないし、もちろん家など建てられない。川沿いに広がる広大な冠水地は、夏場は格好の放牧地や草刈場になる。秋まだ浅い9月にヤギがいることには、何の不思議もなかったのだ。

ネルリ川のポクロフ教会は、四季折々ダイナミックにその姿を変えるのだろう。真冬には雪景色の中の灰色の一点になり、春先は広い湖の水面に浮かぶ舟のごとく、そして短い夏には、一斉に咲いた野の花々が、その気品ある姿をふちどるのに違いない。

浮橋で結ばれる修道院

川は、このように季節によって周囲の景観を変え、流域の人々の生活を変える。クリャジマ川の流れに面したもう一つの小さな町、ウラジーミル州東端のゴロホヴェーツ（Гороховец）でも、そんな光景に出会った。

クリャジマ川の兩岸のうち、ゴロホヴェーツの町は右岸にある。町にはビスケット工場とスキー場の施設があるだけで、他にこれといった産業はないという話だが、町はきれいで、暮らしぶりにもゆとりが感じられる。地方の町にありがちな、傾いた民家や放置された施設は見当たらないし、19世紀に建てられた石造りの建物も健在だ。高台にあるニコラ修道院で鐘楼に登らせてもらおうと、目の前には息を呑むような光景が広がっていた。

クリャジマ川の左岸、つまり町と反対側の岸は、地平線まで延々と続く森である。その中に修道院が一つだけ、緑に埋もれまいと背伸びするように顔を出している。ズナメンスキー女子修道院だ。この風景はどこかで見たような…そうだレヴィタンの絵みたいだ…とつぶやいていたら、中村先生が「静かな僧院 **Тихий обитель** でしょう」と教えて下さった。そうそう！並べてみると実によく似ている。レヴィタンが描いたのはこの地ではないが、川と森によって町と隔てられたこういった場所は適度に俗世から離れていて、修道院には最適なのだろう。それにしてもなぜこの森にはこんなに人の手が入っていないのだろう、と思ったら、地面が湿地でとても家など建てられないのだそうだ。修道院のある場所だけが、かろうじて高くなっているのだという。



クリャジマ川とズナメンスキー女子修道院



レヴィタン「静かな僧院」

この町で、兩岸を結ぶものはただ1本の橋である。しかもその橋は岸边よりもだいぶ水面に近いところであって、ぎしぎしと動く。浮橋なのだ。私達の大型バスも通れることは通れるが、低い橋へつんのめるように降りなければならないのが運転士泣かせ、彼の悪戦苦闘を横目に乗客たちはのんびりと浮橋を歩いて渡らせてもらった。

その後、ズナメンスキー女子修道院ですばらしい昼食をごちそうになったが、その食糧はほぼ完全に自給自足。修道女たちは野菜や果樹を育て、家畜を飼い、チーズやバターを手作りしている。陽気な院長はテーブルの上を指して「買ったものは魚ぐらいよ」と胸を張る（ということは魚釣りだけはしないのだ）。修道女たちのほかに、手伝いの女性が数人いる。外にはトラクターや積みかけの煉瓦があったから、夏の間は多少の男手もあるのだろう。

先ほど渡った浮橋は分解できるようになっていて、冬になる前に岸边へ片付けてしまうのだそうだ。そうすると、川が完全に凍結して上を歩けるようになるまでの間、兩岸を結ぶ手段は手漕ぎのボートだけになる。その間修道女たちは、たまにボートを漕いで町へ行くか、あるいはすっかり左岸に閉じこもってしまうのだという。静かなゴロホヴェーツの町の、さらに川向こうの修道院は、春と秋の数ヶ月を俗世間からまったく切り離されて過ごすのである。

ヴォルガのモン・サン＝ミッシェル

タタリスタン共和国のスヴィヤシスク **Свияжск** は、首都カザンからヴォルガ上流方面へ、車で小1時間ほどのところにある。16世紀、イワン雷帝のカザン占領に先んじて建てられた由緒ある町だが、同時に20世紀に出現した島であるとも言え、位置しているのはヴォルガ川とシューカ川とスヴァガ川の間だ。…この奇妙な説明は、もし私達が本当に「空とぶ船」で旅していてスヴィヤシスクを上から眺めたなら、たちどころに理解できたかも

しれない。しかし実際には私達の交通手段はバスだ。ずっと野原や森の間を走っていたと思ったら、その道がそのまま川の上に出た。水上の長い一本道の突き当たりに見える島が目的地スヴィヤシスクである。島の入り口のゲートで車を降り、石ころだらけの坂道を登っていくと、かたわらの草むらには崩れた家や風呂小屋。坂を上りきって村に入る頃には、みんなの靴もズボンの裾も、きなこをたっぷりまぶしたような色になっていた。その傍らを工事用の大型トラックが砂けむりをあげて走る。何だか、放っておくと壊れそうな島全体をぼつぼつ修理中、といった雰囲気だ。

実は、スヴィヤシスクは 20 世紀半ばまで島ではなく、ヴォルガ右岸の町であった。16 世紀以来教会関係の施設が多く、正教にとってはカザンよりも重要な役割を果たしていたとさえ言われる。しかしソ連政権下で人口は減少し「町」から「村」に降格。30 年代の教会破壊運動を経てついに 1937 年、スヴィヤシスクで最も重要なウスペンスキー男子修道院の建物が、政治犯の収容所にされてしまった。いったいどれほどの数の「政治犯」がここで殺されたが、正確な数字は今に至るまで不明である。

その後もスヴィヤシスクの運命は変転し続けた。1953 年、村はヴォルガに造られる巨大なダムに沈むことが決まり、住民と主な施設は避難する。しかし実際に水面下に消えたのは村の 75% で、もともと高台にあった修道院や教会などは水面から顔を出したまま残った。「島」スヴィヤシスクの始まりである。人口は 500 人を下回り、収容所だった男子修道院は精神病院の施設となった。

この建物が再び正教会に戻されたのは 1997 年。この年には総主教アレクシー II 世の訪問もあり、それ以来スヴィヤシスクは正教の町の復活へ向けてあちこち修復中なのである。だがまだ整備の道のりは遠い。教会の建物は外壁も内壁も無残に剥げ落ちているし、意外に広い島内は、足をきなこ色にしてまで歩き回りたいかと言うと、ちょっと考える。村のおばあちゃんがお土産に売りに来るマグネットが「川原で拾った 16 世紀のかわらけ」というのもふるっている。それでも水の上の道を通ってたどりつく修道院の島という地形は面白いし、景観も歴史も観光客を呼ぶには十分だ。現在ユネスコの世界遺産の登録待ちリストに載っていると言うから、もしかしたら近い将来「ヴォルガのモン・サン＝ミシェル」などと呼ばれて世界じゅうから観光客が来ることになるのかもしれない。



空から見たスヴィヤシスク

(ウスペンスキー修道院のパンフレット表紙より転載)

2009年秋ヴォルガ沿岸を旅した「空とぶ船」からは、こんな光景が見えた。昔話ではストーリーが本格的に動き出すのは都に着いてから。超能力者たちが入れ替わり立ち代り主人公を助けて活躍するのだが…さて、われらが船の行く末はいかに。
